中高生とともに差別と闘う

『『感動』で心に響いてるから』

吉成タダシ

記憶に残る人権学習

「中学時代、部活の帰りOちゃんと歩いてたら、アイツ、カミングアウトしてきたんです。『何で言ってくるん？　わざわざ…。別に差別なんかせぇへんし…。それ言って俺に何を？』って思ってた。

でも別れて一人帰ってる道中で、何でか涙流れました。『イジメ受けてるわけじゃないOちゃんが、何故カミングアウト？　環境、周囲、影響は、自分の想像以上に酷いの？世間知らずだけやったんか？』って考えながら帰った記憶があります。その時も思いました。『学年全体人権学習？　掘り返すなよ。昔ほどじゃないんじゃないの？　俺ら部落差別でイジメてるの学校内で聞いたことないねんけど…。違う所で小競り合いあるだけちゃうの？』って。

討論では、意見言える強者や伝えたいと純粋に発言する者。でも恥ずかしくて言えない、代弁に感謝してる者。色々だったはず。僕は、『オープンにしないで！　全体であからさまにしないで！　そっとしといて！』って思ってる者は誰なんだろうって目で、周囲の顔色を伺ってました。発言してないのに涙流してる人。これ、賛同して泣いてるの？　思い返して泣いてるの？　もうやめて…って思ってるの？　どっちなんだろう…」

「そんなことがあったのか」と、ハッとさせられると同時に、「こんな思いでいたのか」と、複雑な思いになりました。この回答が返ってきて初めて知らされた事実でした。当時把握しきれていなかった、リアルな中学生の思いでした。

しかし、少なくとも彼のなかには確実に、人権学習（当時の部落問題学習）は大きな存在として、数十年どっかと居座り、残り続けていたのです。

若い教員と人権学習について話をするとき、必ず訊くことがあります。

「自分が学生のとき、どんな人権学習受けた？」

多くが、「あまり覚えていない」「受けた記憶がない」と答えます。その度に、残念で悔しい思いになります。当時の先生方は何もしていなかったのか、それとも、してはいたけど、中学生の心には十分に届いていなかったのか。少なくとも、子どもたちの記憶に確かに残る人権学習にはなっていなかったのかもしれません。では、子どもたちのなかに確かに残り、後の人生にも影響を与え続けていけるような人権学習とは、いったいどういったものなのでしょうか。

社会に出て試される人権学習

「これが、僕の中間的な立場の正直な感想です。『当時』のね！　今はね、それ以上に世の中知って…。

高校卒業してから○○（都市名）に住んでるんですけど、もっと部落差別がギスギスしてて、在日も多くて。『今（社会人になって）』、『ようやく』、討論する理由・重要性が分かりました。『先生方の熱さは何故？』っていうのは、社会に出てからです。

これが部落問題を知らず、当事者被害も受けてなく、親友にカミングアウトされても他人事のような立場で全体学習に参加していたパターンの一人の感想です。幼稚でその瞬間を生きてた中学生には後々からじゃないと理解できませんでした。そう振り返ると、先生方はホント大変で悩みながらの運営だったと思います」

実はこのパターンはよくあるのではないかと思います。社会に出てから目の当たりにするリアルな差別。そこで、それまで受けてきた人権学習が試されるわけです。それがしっかりした学びであれば、差別のおかしさに気づき、正していけるのでしょう。正せなかったとしても、踏み留まることはできるのではないかと思います。しかし、記憶に留まってなかったり、中途半端な学びで逆に差別意識をもってしまうようであれば…。そう考えると、中途半端な人権学習であってはいけない。子どもたちの心に確かに残る人権学習にしていかなければいけないと思うのです。

『感動』で心に響いてるから

彼の回答にどうしても言葉を返したくて、メールを送りました。それにまた返事が返ってきました。

「先生から『リアルに覚えてたんだ』って言葉貰いましたけど、それは先生の熱血の成果ですよ。

懐かしい歌聞けば当時が走馬灯のように思い出されます。でも三日前の出来事覚えてません。コレ、記憶じゃなくて『感動』で心に響いてるからなんですよね？

僕、全体討論の席まで覚えてます。体育館の校庭側、前列三番目でした。向かいの窓から職員室越しに青天で…感じたことは温度差・個人差あるでしょうが、僕は残ってます」

またしても驚かされました。「こんなに鮮明に残り続けていたのか」と。彼の中に残っていたリアルな記憶に心動かされて送ったメールの返事には、当時の人権学習の場にタイムスリップしたかのような景色が、鮮やかな色彩で描かれていました。

常々、人権学習を進めていくうえでの大切な要素を、「知・感・行・仲」と捉えてきました。「知」は、知識に留まらない、知恵や知性の「知」。「感」は、感性や共感、感動の「感」。「行」は、行いや行動力の「行」。「仲」は、仲間の存在としての「仲」。このうちどれが欠けても、またどれに偏っても、人権学習は成立しないように思います。「知識が大切だから知識をしっかり得たいです」と言う中学生に出くわすことがあります。間違いではないと思うのですが、やはりそれはどこか欠けてるように感じるのです。彼のように、感性として残り続けていく人権学習も、大切な要素だと思うのです。友との真剣な語り合いは、その「感」を大切に育んでくれるのだと思います。

（次回「ホンネとタテマエ」）

イラスト　中島　亜唯